

## バウムガルテンの「神」概念

——『形而上学』第4部「自然神学」第1章「神の概念」第1節「神の存在」試訳——

檜垣 良成・石田 隆太<sup>1</sup>

### はじめに

現代においては「神」というものは消極的に取り扱われることも多い。しかし、その一方で依然として神に対する信仰が生活の中心を占める人々も多く、その数は決して減少傾向にあるとばかりは言えない。少なくとも、人間の生にとって欠かすことのできない「真理」や「善」の普遍性を堅持する（このことは「理性」の可能性も意味する）ための虚焦点としての意義は将来も決して失われることはないであろう。

「目的論」という考え方も、近代科学の台頭以降、古色蒼然たる過去の遺物として取り扱われることが多いが、「目的」という概念を主観化し、限定的な意味しかもたない道具のように扱う現代社会において数々の混迷が惹き起こされているようにも見える。「自由主義」社会の根幹には、この目的概念の主観化という問題が潜んでいる。グローバル経済は一見すると世界中の人々が共存する好機と映るかもしれないが、実際には党派的な利害に執着する動きやエゴイズムを助長する装置として機能している。果たして、客観的な目的なしに道徳的な世界は可能であろうか。

カントは確かに「客観的目的」の概念を批判し、「主観的な合目的性」のみを許容した。しかし、その思想は現代のリベラリズムに直結するものであろうか。理論（観察）哲学と実践哲学の名著（『純粋理性の批判』および『実践理性の批判』）を上梓した後で、どうしても目的論の批判とも言う『判断力の批判』（特に後半部の「目的論的判断力の批判」）を仕上げねばならないと気づいたのはなぜであろうか。「客観的目的」の概念のもつネガティブな側面については、理論と実践の両面で既に批判済みであった。ここにカントの目的論を再検討する必要性が見いだされないであろうか。

こうした問題を解明する準備作業として、「目的論」(teleologia) というジャンルを「神の創造の目的」のコンテクストの中で意識的に哲学に導入したアレクサンダー・ゴットリープ・バウムガルテンの「自然神学」(theologia naturalis) をまず検討する。そのテキストは彼の『形而上学』の第4部にある。「自然神学」の「プロレゴメナ」(prolegomena) によれば、そもそも「自然神学」とは、信仰なしに認識されうるかぎりにおける神についての学である<sup>2</sup>(cf. § 800)。自然神学は、実践哲学、目的論、啓示神学の第一諸原理を含む。

一〇〇

<sup>1</sup> バウムガルテンの本文の訳は2人の合議によるものであるが、それ以外に関しては、担当者をH（檜垣）、I（石田）の略記によって示した（H）。

<sup>2</sup> Cf. 「神について取り扱う哲学の部分が自然神学と言われる。そのようなわけで、自然神学は、神によって可能なものと知解されるものどもの学として定義されうる。というのも、哲学は、あることが可能であるかぎりでは可能なものどもの学だからである。そのようなわけで、神に内在するものどもおよび神

それゆえ、それは正当に形而上学 (§ 1) に数え入れられる (§ 2) (cf. § 801)。自然神学は、1) 神の概念と 2) 神の諸々のはたらきを考察する (cf. § 802)。本稿では、この第 1 章「神の概念」の第 1 節「神の存在」を検討する。

カントが神の存在の観察的 (theoretisch) な証明を批判したことは有名であるが、そのときに相手にしていたのがバウムガルテンの立論である。カントが多用する「最も実在的な有」(ens realissimum) という「神」概念は、バウムガルテンが定式化したものである。以下、彼の立論を見てゆこう (H)。

### 『形而上学』第 4 部「自然神学」第 1 章「神の概念」第 1 節「神の存在」試訳<sup>3</sup>

「最も完全な有」[ens perfectissimum, das vollkommenste] とは、それに諸々の有における最高の完全性があるところのものである。すなわち、それにおいては、可能なものの最多最大のものへと何らかの有において合致しうるほどに多くのそして大きなものが、そのようなほどに合致しうる程度に、そのように合致しうるほどに多くのそして大きなものへと合致するところのものである (§ 185)。それゆえ、最も完全な有においては、絶対的に必然的に或る種の複数性がある (§ 74) (cf. § 803)。

---

によって生じることが可能だと知解されるものどもも可能なものどもに数えられ、神の存在をできるだけ早く認めるかぎりそのことを誰も否定しなかつただろうから、それゆえ、自然神学は、神によって可能なものであるものどもの学である」(ヴォルフ『哲学一般についての予備的序説』第 3 章 § 57)、「自然神学とは、神によって可能なものであるものども、すなわち、神に内在するものども、および、神に内在するものどもによって生じることが可能だと知解されるものどもの学である」(ヴォルフ『学問的方法によって論究される自然神学』(以下では『自然神学』と略記) 第 1 部プロレゴメナ § 1)。後者の箇所が続いて書かれている注解部分において、ヴォルフ自身は次のような説明を行っている。「自然神学は、神および神的な諸物について理性の諸原理から獲得される学として普通は定義される。そしてこの定義は、私たちの定義とは異なっていることをもつのではない。というのも、神的な諸物とは、神が与えられ神にしかじかの諸属性が内在するというのゆえに、可能なものとして把握されるものだからである。そしてこの学が、理性の諸原理の助けによって、ないし、他の人々が語ることを熱望することには、自然の単なる光によって、確かに当然のことながら魂の諸能力の使用によって、獲得されるべきものであるということが私たちにによって付言されなくとも、それにもかかわらずそれ自体によってそのことは知解される。というのも、自然神学を哲学の部分としてわれわれは論じるからである。ところで、あらゆる哲学には、自然の単なる光によって、すなわち、自然によって魂に内在しているところの魂の諸能力の正しい使用によって、哲学に関わり合う、可能なものどもの認識が獲得されるということが固有である」。ヴォルフによる自然神学の定義も理性主義的なものではあるが、Fugate と Hymers も注釈しているように、バウムガルテンによる定義は自然神学に信仰が介在する余地のないことが強調されていると言える (I)。

<sup>3</sup> *Metaphysica*, 1739 Halle. 2. Auflage, 1743. 3. Auflage, 1750. 4. Auflage, 1757 (In: *Kant's gesammelte Schriften*, herausgegeben von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften Bd. XVII). 5. Auflage, 1763. 6. Auflage, 1768. 7. Auflage, 1779 (Reprint: Hildesheim 1973). 本稿では、カントが使用した第 4 版を底本とする。frommann-holzboog から出版された Günter Gawlick と Lothar Kreimendahl による全パラグラフの羅対訳版 (*Metaphysica, übersetzt, eingeleitet und herausgegeben von Günter Gawlick und Lothar Kreimendahl*, Stuttgart-Bad Cannstatt 2011)、および、Courtney D. Fugate と John Hymers による批判的英訳 (*Metaphysics, A Critical Translation with Kant's Elucidations, Selected Notes, and Related Materials*, translated and edited with an Introduction by Courtney D. Fugate and John Hymers, London, New York 2013) を参照した (H)。

最も完全な有の諸述語はその完全性と言われる。最も完全な有のうちには、有において同時にありえて共可能であるだけ多くの最多に合致する完全性がある (§ 803) (cf. § 804)。

最も完全な有のあらゆる完全性は、何らかの有においてありうるだけ大きい (§ 803,804) (cf. § 805)。

最も完全な有は、実在的な有である (§ 803,135)。それゆえ、それには、有においてありうるだけ大きな実在性が適合する。最も完全な有は、そのうちに最多最大の実在性があるところの「最も実在的な有」[ens realissimum] であり (§ 805,804)、「最高のよいもの」[summum bonum] であり、「形而上学的に最もよいもの」[optimum metaphysice] である (§ 190) (cf. § 806)。

あらゆる実在性は真に積極的なものであり、いかなる否定性も実在性ではない (§ 36)。それゆえ、あらゆる実在性が最大度に有において結合されているとしても、決してそれらから矛盾は生じない (§ 13)。それゆえ、あらゆる実在性は有において共可能である。ところで、最も完全な有は諸有の中で最も実在的なものである (§ 806)。それゆえ、最も完全な有には実在性の、しかも何らかの有においてありうる最大の実在性の総体が適合する (§ 805,190) (cf. § 807)。

実在性が定立されると否定性が廃棄される (§ 36)。ところで、最も完全な有のうちには、あらゆる実在性が定立されねばならない (§ 807)。それゆえ、あらゆる否定性は廃棄されねばならない (cf. § 808)。

あらゆる不可能なものにおいては、或るものが定立されると同時に廃棄されねばならない (§ 7)。それは否定性が実在性かである (§ 36,9)。最も完全な有においては、いかなる実在性も廃棄されてはならない (§ 807)。最も完全な有においては、いかなる否定性も定立されてはならない (§ 808)。それゆえ、最も完全な有においては、何も廃棄されると同時に定立されてはならない。最も完全な有は可能である (§ 8) (cf. § 809)。

存在は、本質および残りの実在性と共可能な実在性である (§ 66,807)。それゆえ、最も完全な有は存在をもつ (§ 807)<sup>4</sup> (cf. § 810)。

「神」[Deus, Gott] は最も完全な有である。それゆえ、神は現実的である (§ 810,55) (cf. § 811)。

神の諸述語は完全性であり (§ 811,804)、あらゆる最大の実在性である (§ 807)。神の可能性そのものは最大の可能性であり、しかも、1) 神のうちでは最多最大のものが共可能であるかぎりでは (§ 805,807)、内的で絶対的な最大の可能性であり (§ 165)、2) 神のうちなる最も実り豊かで最も重大な諸根拠があらゆる可能世界の全連結において、神のそとでありうる最も実り豊かで最も重大な諸帰結をもつかぎりでは、外的で仮定的な最大の

<sup>4</sup> Cf. 「神は必然的に存在する。その理由は以下のとおりである。神はあらゆる共可能な実在性を絶対的に最高の度において含む。それに対して、神は可能なものである。そのようなわけで、可能なものは存在することが可能であるのだから、存在は可能なものに内在することが可能であり、したがって、存在は実在性であり、一つの有に内在することが可能である諸実在性は共可能であるのだから、存在は共可能な諸実在性に数えられる。ところでさらに、必然的存在は絶対的に最高の度に属する。したがって、必然的存在は神にふさわしい、あるいは、同様のことではあるが、神は必然的に存在する」(ヴォルフ『自然神学』第2部第1節第1章 § 21) (I)。

可能性である (§ 168) (cf. § 812)。

神のうちにはいかなる否定性もなく (§ 808)、それゆえ、厳密な意味での否定性も、欠如 (§ 137) も、「形而上学的なわるいもの」[malum metaphysicum] も、「偶然的なわるいもの」[malum contingens] (§ 146) も、「自然学的なわるいもの」[malum physicum] も、どんな意味での「道徳的なわるいもの」[malum morale] (§ 788) もない (cf. § 813)。

神の概念のうちでは単に全体的に否定的な諸徴表が不可能であるのみならず (§ 525)、部分的に真に否定的な徴表も不可能である (§ 813,808)。私たちには、神のうちなる多くの最大度に実在的なものが否定的であるように見えるけれども (§ 12)。というのは、一部には、私たちが諸否定性を肯定的な名辞で表現するからであり、一部には、否定性の否定が肯定するというを私たちが十分に覚えていないからである (§ 36,81) (cf. § 814)。

神の諸完全性は、彼のうちで絶対的であるか、相対的であるかであり、後者において或る種のものとは関係性である (§ 37)。それらの完全性は、活動の徴表なしに私たちによって表象されうる「**静かな完全性**」[perfectio quiescens, ruhende Vollkommenheit] であるか、それとも、活動の徴表なしには表象されえない「**はたらく完全性**」[perfectio operativa, wirksame Vollkommenheit] であるかである (cf. § 815)。

それから結局は残りのあらゆる内的完全性が、のちに循環を避けんとする者たちによって神の他の内的完全性から導出されうるということがない仕方では導出されるところの、神の内的完全性は、神の「第一概念」[conceptus primus] である (§ 40,39)。ところで、神の無限の諸完全性はどれも最大で (§ 812,166) 最も充足的な根拠であり (§ 169)、したがってまた端的に究極の (§ 170) 最大の本質であるかぎりでは (§ 171)、それらから、残りの完全性の先のような導出は可能である (§ 24,49)。それゆえ、神についての第一諸概念は無限であるが、それらのいずれも、本質と見なされるなら、神の唯一の本質である (§ 40,77) (cf. § 816)。

神のうちには、彼のうちであらゆるものからあらゆるものが最も真に認識されるほど (§ 816)、最大で (§ 808,167) 最大度に普遍的な (§ 172) 連結があるにもかかわらず、神の一つの完全性からは、他の完全性からよりも容易に私たちによって彼の残りの完全性が認識される (§ 527)。それゆえ、それから最も容易に残りの完全性を演繹することを私たちが期待するような完全性を本質と見なすことが望ましい (§ 816)。神におけるあらゆる複数次性が不可能であるというどころか、むしろ神の本質そのものにおいて、そして、それによって、絶対的に必然的に或る種の複数次性が定立される (§ 812,816) (cf. § 817)。

神は、あなたが想定する本質なら何であれ、そのような (§ 817) 本質以外に、何かがあるものが内的なものにも関して規定されうることには (§ 812) 残りの内的諸完全性に関しても (§ 816) 規定されている。それゆえ、神は現実的である (§ 54) (cf. § 818)。

神は存在に関して規定されている (§ 818,811)。それゆえ、神は有であり (§ 61,57)、否定的な非有でも欠如的な非有でもない (§ 7,54) (cf. § 819)。

神が可能であることから彼があることを帰結することは妥当である。すなわち、神の存在は彼の本質によって充足的に規定される (§ 809-811)。しかも、最大の存在として (§ 805)、何らかの有において共可能的な最多最大の変様の総括として、すなわち、あなたが想定する本質なら何であれ、そのような (§ 817) 最大の本質の (§ 816) 永遠の (§ 302) 補完 (§ 55) としてである<sup>5</sup> (cf. § 820)。

神には最大の (§ 812) 一性が、最多最大の諸実在性の不可分離性 (§ 173) が適合する (§ 819,73)。したがって、1) どのように神は傑出して完全な一性と言われうるのかが明らかであるが、その一性は、いかなる仕方で神の諸完全性のうちで最大度に不毛に見えるものどもも、それにもかかわらず、神の本質であるのかの例としてありうるのであり (§ 816)、2) 神の最高の一性が定立されると、不可分離的な諸完全性の或る種の複数性が神のうちで単に廃棄されないのみならず、定立されもするということが明らかである (§ 74) (cf. § 821)。

神には最大の (§ 812) 超越論的真理 (§ 819,90) が、彼の諸完全性の最高の秩序 (§ 175,89) が、最高の可能性 (§ 812) が、最高の連結 (§ 817) が、最強の諸規則——例えば、「最もよいものは最もよいものと結合される」という「一般的に最もよいものの法」(lex optimum generatim) (§ 482,187)、「最も完全な有において共可能的なもののうち最もよいものは、最もよいものと結合される」という「諸有における最もよいものの法」 (§ 803) ——との最高の適合 (§ 176,184) が適合する (cf. § 822)。

非現実的な神とは、あらゆる実在性に恵まれたものであるが、それにもかかわらず、或る種の実在性が欠けているような有であろうし (§ 66,812)、有が内的なものどもに関して規定されうるだけ、あらゆる内的完全性に関して、規定されているが (§ 818)、それにもかかわらず、若干の内的完全性に関して、そのように規定されていないようなものであろう (§ 54)。それゆえ、神の存在の反対はそれ自身のうちで不可能である (§ 15)。神の存在は絶対的に必然的である (§ 102)。神は、その最高の存在 (§ 820) がみずからの本質 (§ 819) である——それにもかかわらず、§ 817 を損なわない仕方で——ところの必然的有 (§ 109) である (cf. § 823)。

もしも神が現実的でないとするなら、矛盾の原理——私たちのあらゆる論証における形相と質料の第一原理——は誤りであることになってしまう (§ 823,7)。それゆえ、多くの学が何らかの神学的諸前提なしに十全に論証されうるが (§ 1-800)、それにもかかわらず、それらの学も、それらの学の客観もあるのではないことになってしまうであろうし (e. g. § 61,354,504)、それどころか、神が現実的であったのでないかぎり、それらは決して可能ではないことになってしまうであろう (§ 8) (cf. § 824)。

神は必然的有である (§ 823,824)。必然的有のうちには様態はない (§ 111)。それゆえ、神のうちには様態あるいは述定されうる附帯性はない (cf. § 825)。

もしも私たちが**必然的有のうち**に「偶然的有において表象されたものどもに部分的には似ており部分的にはそれらと異なっているもの」を見つけるが、それにもかかわらず諸相違を十分には知解せず、またそれに特有の名を見いださないなら、それを私たちは「私たちが**偶然的有において似ていると識別したものの類比物** [analogon]」**と言**い、それは**神にも類比** [analogia] **によってあてがわれ**、諸実在性がその概念において支配的であるように見えるなら、「**傑出**」 [eminentia] (卓越 [excellencia]) によって〔無限に際立った意

<sup>5</sup> Cf. 「神はみずからの本質によって存在する。その理由は以下のとおりである。神はそれ自体からの有である。もちろんのこと、それ自体からの有は、みずからの存在の充足的根拠をみずからの本質のうちにもつ。そのようなわけで、神もみずからの本質のうちのみずからの存在の充足的根拠をもち、したがって、神の本質が定立されると、同時に神の存在も定立される。したがって、神はみずからの本質によって存在する」(ヴォルフ『自然神学』第1部第1章 § 72) (I)。

味において〔in unendlich-ausnehmender Bedeutung〕そうであり、諸否定性が支配的であるように見えるなら、「還元」〔reductio〕によって（否定の道で）〔純化された意味において〔in geläuterter Bedeutung〕〕そうである（cf.§ 826）。

もし私たちが必然的有のうちに、それらが仮定的に必然的であることが絶対的に必然的であるような或る種のものを見つけるなら、それらが仮定的必然性に関して様態に似ているかぎりにおいて（§ 108）、それらは「諸様態の類比物」〔das den Zufälligkeiten ähnliche〕（§ 826）と言われ、それらが神のうちに仮定的に必然的なものとして存在することが本質によって絶対的に必然的であるかぎりにおいて（§ 823,54）、属性である（§ 107）。したがって、神の諸属性は、有限なものの属性に似たものと有限なものの様態に似たものへと分かたれうる。後者も真なる属性である。というのも、1）それらの存在の——それが未規定性に背反して区別されるかぎりにおいて（§ 54）——充足的根拠が神の本質のうちにあるからである。偶然的有は多くのものに関して未規定でありうる（§ 34,134）。必然的有はいかなるものに関してもそうではありえず、しかも本質によってそうである（§ 820）。2）ひとたび神のうちにあるものどもの継続、永遠性および不可変性の充足的根拠が神の本質のうちにあるからである<sup>6</sup>。偶然的諸有においては、本質的な限界が、何故にそれらの有はそれらが存在するかぎりにおいて不断に内的に変えられねばならないのかの充足的根拠である。必然的有においては、本質的な無限性が反対の充足的根拠である。すなわち、3）何故にこれらの代わりに他のものどもが永遠から永遠へ神のうちに存在しえたのかの。したがって、4）何故に他のものどもではなくこれらの存在が別様に——単に仮定的必然性によって（§ 102）——ではなくそのように規定されているのかの（cf.§ 827）。

「聖性」〔sanctitas, Heiligkeit〕とは、それによって有の真にそのような複数の不完全性が廃棄される場所の有の実在性である<sup>7</sup>。したがって、「最も聖なるもの」〔sanctissimum, das Allerheiligste〕とは、その実在性によってそのあらゆる不完全性が廃棄される場所のものである。ところで、神における最大の実在性の総体によって、神におけるあらゆる不完全性が廃棄される（§ 142,808）。それゆえ、神は最も聖なるものである（cf.§ 828）。

神においては、いかなる不完全性もない（§ 828）。それゆえ、本質的な不完全性も附帯的な不完全性も内的な不完全性も外的な不完全性もない（§ 121,808）。同じことは § 813 から明らかである（cf.§ 829）。

神においては、何故に彼の諸完全性は彼のうちに存在するのかの充足的根拠がある（§ 822,823）。それゆえ、狭義の力がある（§ 197）。したがって、神は実体である（§ 199）（cf.§ 830）。

<sup>6</sup> Cf. 「それ自体からの有は存在の根拠をみずからの本質のうちにもつ。その理由は以下のとおりである。それ自体からの有は他のあらゆる有に非依存的であり、したがって、みずからの存在の根拠も他のものうちにもつのではない。したがって、それ自体からの有はみずからの存在の根拠をそれ自体のうちにもつ。そのようなわけで、何故に或るものがそれ自体からの有に現実的に内在したり、内在することが可能であったりするのかの充足的根拠は本質のうちに含まれるのだから、それ自体からの有の存在の根拠はその本質のうちに含まれるべきである」（ヴォルフ『自然神学』第1部第1章 § 31）（I）。

<sup>7</sup> Cf. 「聖性〔sanctitas〕とは、正しいものであるものだけを行なう、恒常的で永久的な意志である」（ヴォルフ『自然神学』第1部第7章 § 1063）（I）。

神は最大の (§ 812) 力 (§ 830) をもつ。それゆえ、最多最大の附帯性を現実化するのに充足的な力をもつ (§ 203) (cf. § 831)。

諸々の附帯性はみずからの実体のそとでは存在しない (§ 194)。それゆえ、最多最大の附帯性を現実化するのに充足的な力は、最多の実体を現実化するのに充足的である。それゆえ、あらゆるものを現実化するのに充足的である (§ 191, 247)。或るものを現実化するのに充足的な力は「能力」[potentia, Gewalt] である。したがって、「全能」[omnipotentia, Allgewaltigkeit] とは、あらゆるものを現実化するのに充足的な力である。神は全能なものである (§ 831) (cf. § 832)。

絶対的に不可能なものどもは無である (§ 7)。それゆえ、絶対的に不可能なものどもをできる者は無をできることになってしまう (§ 469)。神は全能である (§ 832)。それゆえ、神の全能は絶対的に不可能なものどもへは及ぼされない。或るものにとって不可能であるのは、その現実化のためにみずからの諸力が充足的でないものである (§ 469)。この意味において神にとっていかなる物も不可能ではない。それゆえ、私たちおよびあらゆる有限なものにとって不可能なあらゆる物が神にとって可能である (§ 832) (cf. § 833)。

諸々の奇跡は可能である (§ 475)。神の力はあらゆる可能なものを現実化するために充足的である (§ 832)。それゆえ、神は厳密な意味での諸々の奇跡を実行することができる (§ 477, 833) (cf. § 834)。

神はあらゆる可能世界を現実化することができる (§ 832)。それゆえ、最もよい世界も (§ 436)、最も不完全な世界も例外なく (§ 442) 現実化することができる (cf. § 835)。

神は実体であり (§ 830)、いかなる様態ももたない (§ 825)。それゆえ、彼は必然的な実体であり (§ 202)、いかなる内的状態ももたず (§ 206)、可変容的ではない (§ 209)。そこから、あらためて明らかであるのは、世界は神の変容であることはできないということである (§ 388) (cf. § 836)。

必然的な実体の、あらゆる出現と消失、無からの出現と無化は絶対的に不可能である。神は必然的な実体である (§ 836)。それゆえ、あらゆる出現と消失は神においては絶対的に不可能である (§ 227, 228) (cf. § 837)。

あらゆる実体はモナドである (§ 234)。神は実体である (§ 830)。それゆえ、神はモナドであり、単純な有である (§ 230)。神の最高の単純性が定立されると、なるほど、彼が何らかの根拠によって諸部分のそとの諸部分から合成されているということは廃棄されるが (§ 224)、しかし、神における複数のものの最も実在的な (§ 807) 差異性は廃棄されない (§ 817)。なぜなら、有限なものどもにおいても、あらゆる実在的に異なるものが相互のそとに定立されていることは誤りだからである (§ 755) (cf. § 838)。

神は必然的な有である (§ 823, 824)。あらゆる必然的な有の諸規定は絶対的および内的に不

<sup>8</sup> Cf. 「神の意志は不可変的である。起こりうるのなら、神の意志は可変的であると定立してみよう。もはや同じまま留まらないかぎりや或るものは現実的に変えられるのだから、神は、以前は意志したものを今は意志せず、それとは異なる別のものを意志するのであり、また、今は意志するものを後になって意志せず、むしろこれとは異なる別のものを意志するだろう。そのようなわけで、さらには、以前にはあるのではなかったがあるもの、ないし、今はあるのではないがあるだろうものは永遠ではないのだから、神はあらゆるものを永遠から意志するわけではない。このことは不合理であるがゆえに、神の意志が変えられるということは不可能である」(ヴォルフ『自然神学』第1部第3章 § 368) (I)。

可變的である (§ 132)。それゆえ、神は絶対的および内的に不可變的である (§ 126,127)<sup>8</sup>。同じことが次のように明らかである。すなわち、もしも神が絶対的および内的に可變的であるとするなら、少なくとも彼の或る種の内的完全性は他の完全性の後に存在しうることになってしまう (§ 124)。したがって、みずからの前に存在しえたものの存在が廃棄されうることになってしまうであろう。この存在は神にとって内的な実在性である (§ 37)。それゆえ、神の諸実在性からの或る種の諸実在性が他の諸実在性から分離されうることになってしまうが (§ 72)、このことは神の最高の一性に反している (§ 821) (cf. § 839)。

もしも神が合成されているとするなら、彼は延長しており (§ 241)、彼にも慣性力があるがわれねばならないことになってしまう (§ 832,294)。したがって、彼は質料であることになってしまう (§ 295)。それゆえ、可分的で (§ 427)、かくして内的に可變的であることになってしまう (§ 244,126) が、このことは § 839 に反する。それゆえ、神は単純な有である (§ 224)。そして、神は実体であるので (§ 830)、彼はモナドである (§ 230)。あらためて、普遍的質料主義者が誤っているということが明らかである (§ 395)<sup>9</sup> (cf. § 840)。

神のうちには「相互のそとに定立される同時的なもの」はなく、彼自身の部分もなく (§ 840)、したがって、空間もない (§ 239)。それゆえ、神は延長しておらず、「延長しているものどもがそれを満たしている」と言われる (§ 241) 意味では空間を満たしているでもない (cf. § 841)。

神は、最多最大の実在性をもつ (§ 807,812) 最大の有 (§ 161) であるが、量的な大きさをもたない (§ 838,243)。あらためて、神は不可分的であり、しかも絶対的にそうであるということが明らかである (§ 244) (cf. § 842)。

ありうる最大の実在性の総体は、実在性の最大の度である (§ 247,248)。この度が最も実在的な有としての神に適合する (§ 807,812)。それゆえ、神は無限で実在的な有である (§ 248)。同じことは、神が必然的有であることから明らかである (§ 823,258) (cf. § 843)。

神のあらゆる完全性はそれらの実在性の、それらが有においてもちうる最大の度をもつ (§ 812)。したがって、それらの完全性自身もすべて無限である (§ 248)。これらの完全性の各々いずれの最高の実在性にも、最も完全な有における合致が属する (§ 139,140)。それゆえ、一つの無限の実在性があるところには、あらゆるそれがあり、あらゆるそれがあるところには、最高の諸実在性がある (§ 843)。それゆえ、一つの無限の実在性があるところには神がある (§ 811)。したがって次のようなことが得られる。すなわち、いかなる根拠で神の複数の完全性が——あるときはこれらの、あるときはあれらの完全性が——、あたかも第一諸概念のようにとられうるのか (§ 816)、そして、何故に神のほかに神と

<sup>9</sup> バウムガルテンの『形而上学』第2部第2章第1節 § 395によれば、「普遍的質料主義者」とは「諸々のモナドの存在を否定する者」のことである。この立場を神にも質料があることを認める立場と見なした場合、西洋中世ではディナンのダヴィドという思想家がまさに神に質料があることを認めて異端視されたことを想起することができる。他方でそれとは別に、天使に質料があるか否かをめぐって例えばボナヴェントゥラとトマス・アキナスの間では見解の相異が見られることが哲学史的には興味深い。トマスは天使には質料がないことを主張する一方、ボナヴェントゥラは天使に靈的質料があることを認めていた。哲学史研究ではボナヴェントゥラのように天使にも質料と形相の複合があることを認める立場を「普遍的質料形相主義」と呼ぶことがある (I)。

同等の能力の、わるいものの創始者が容認されえないのが。「マニ教」〔manichaeismus〕とは、神と同等の能力の、わるいものの創始者が存在すると定立する見解であるが、それは誤りである (cf. § 844)。

神は現実的に、内的諸完全性に関して、ありうるいずれのものでもある (§ 843,259)。あらためて明らかであることは、循環が警戒されさえするなら、神は内的に不可変的であり (§ 252)、必然的有でもある (§ 843,256) ということである (cf. § 845)。

複数の神は不可能である。その理由は以下のとおりである。神が複数あるかぎりにおいて、それらは部分的には異なることになり (§ 74)、したがって、他の神においてないものが一つの神においてあることになってしまう (§ 38)。このものは実在性であるか、それとも否定性であるかであるだろう (§ 36)。それが実在性であるとするなら、それが欠けている者は神ではないことになるだろう (§ 807)。それが否定性であるとするなら、それが内在する者は神ではないことになるだろう (§ 808)。一つの実在性が一つの神においてあるが、別の等価の実在性が別の神においてあると定立されるとするなら、どちらにおいても実在性の総体はなく、したがって、どちらも神ではないことになるだろう (§ 807)。それゆえ、これまで私たちが省察してきた (§ 811-845) 神は、あらゆる最大で絶対的に不可分離的な実在性の、以下のようなほど最高に一なるものである (§ 821)——これとは異なる他の一なるもの、あるいは、これとは異なるもう一つ別の一なるものが、これまで私たちが見てきたような (§ 811-845)、神がそれであることが必然的であるところのものではないし、それではありえないほど——ので、これまで私たちが省察してきた神は唯一の神である (§ 77)。「多神論」〔polytheismus, die Vielgötterey〕とは、複数の神を定立する見解であり、誤りである。私たちはむしろ神における真に最高の唯一性を崇拜し、その唯一性によって最大の有 (§ 842) があらゆるものから、その類における最大のものからすら、例えば、最もよい世界の全自然や有限なものの中で最大の精神から、最多最大の違いによって (§ 844) 区別される (§ 173)。この最大の違いは次のように諸々の関係そのものへ及ぼされる。すなわち、これまで考察されてきた神であるのではないところの物と、第三の物との間には、この神と与えられた第三の物との間にあるような質と量の関係は介在できないというふうに (§ 812,817)。神のこの最高の唯一性によって、たとえそれは他の場合であれば最大であるとしても、神であるのではない何らかの物の、神との同等性なるほど廃棄されるが、単にほとんど全体の類似性が廃棄されるのみならず、神と他のあらゆるものとの間に定立されるべき無限の非類似性を廃棄するような類似性も廃棄されるが (§ 844)、それに対して、神のうちなる最大のものどもの複数性およびこれらの同じものどもの最高に無限で相対的な違いは廃棄されず (§ 37,174)、むしろ、無限の諸特徴において、神をあらゆる物から区別するものが定立される (§ 67) (cf. § 846)。

神の単純性があらためて明らかである。その理由は以下のとおりである。もしも神が合成されているとするなら、彼の諸部分は、相互のそとに定立された実体であることになってしまう (§ 225,282)。これらのうちの唯一のもののみが無限な実体であるだろう (§ 846)。それゆえ、残りのものは有限な実体であるだろう (§ 77,248)。したがって、神のうちにある種の絶対的に必然的な不完全性が定立されねばならないことになってしまうであろう (§ 250,155)。このことは § 828 に反する (cf. § 847)。

神は形をもたない (§ 280,847)。「より粗野な擬人論」〔anthropomorphismus crassior〕

は、神に形を、例えば人間の形をあてがう人々の誤りであり、「より精妙な擬人論」〔anthropomorphismus subtilior〕は、神に有限な諸物の諸不完全性を、例えば人間の不完全性をあてがう誤りである (§ 828) (cf. § 848)。

神のうちには継起するものはない (§ 839,124)。それゆえ、神のうちには時間もない (§ 239)。神は、継起するものどもの部分を構成するように時間のうちにあるのでもない (§ 124,837)。そして、出現と消失が彼には絶対的に不可能であるかぎりにおいて (§ 837)、彼は最大で (§ 812) ただ一つの実在的に無限の (§ 844,846) 継続 (§ 299) をもち、したがって、彼は永遠であり (§ 302)、あらゆる時間と共在し永続的である (§ 303)。神はあったし、あるし、あるだろう (§ 298)。神は存在する。(cf. § 849)。

永遠の偶然的有が定立されるなら、その永遠性は神の永遠性とは多くの点で異なる (§ 67)。1) その偶然的有の継続は、諸変容の連続した継起に拘束されている (§ 209,836)。2) その永遠性は、なるほど拡張の終わりをもたないが、それにもかかわらず、そのために「実在的に無限」とはまだ言われえない (§ 259,849)。3) その永遠性は、始まりと終わりなしの時間であり、そのために無限とは言われうるであろうが、しかし、数学的にであって、そのため実在的にはない (§ 248,849)。なぜなら、継起する有 (§ 238) は、決して現実的に、内的諸規定に関してありうるいずれのものでもあるのではないからである (§ 259) (cf. § 850)。

神は、必然的で (§ 823,824) 無限な (§ 843) 有である。したがって、彼はそれ自体からの有〔ens a se〕であり、非依存的な有である (§ 310)。彼は、彼のそとに定立された別のものによって原因されたものではないというように存在し (§ 849)、みずからの諸結果の端的にそのような〔simpliciter talis〕原因である (§ 318)。神のあらゆる完全性は実在的に無限であり (§ 844)、したがって、神のいかなる完全性も、神のそとに定立されたものによって原因されたものであるのではなく、ありうるのでもない (§ 381,248,310)。それに対して、受動〔passio〕が神の述語であるとしよう。そのようなものは、神のそとに定立された或るものによって原因されたものであることになってしまう (§ 210)。それゆえ、神は全く不可受動的であり、観念的にも、実在的にも、みずからのそとに定立されたいかなる物からも受動せず (§ 212)、そして、彼のそとに定立された何らかのものが彼のうちへと働きかける〔agere〕こともなく (§ 210)、それゆえ、彼は反応することもない (§ 213)。神の、宇宙へのあらゆる活動〔actio〕は、観念的なものであれ実在的なものであれ、反応なしのものである、 (§ 212) (cf. § 851)。

諸々の「像」〔imago, Bild und Gleichnis〕は、1) 他のものの形のしるし〔signum〕である。ところで、神は形をもたない (§ 848)。それゆえ、神の諸々の像はこの意味においては不可能である (§ 347)。2) 諸々の像は、識別されうる度において他のものに似ているものである。あらゆる有は神に何らかの度において似ているので (§ 265)、あらゆるより完全な有は神の像であるだろうし (§ 70,811)、より完全であれば、より神に似ており、それゆえ、神のより大きな像であるだろう (§ 265,160) (cf. § 852)。

世界は有限な現実的なものどもの全体である (§ 354)。神は有限な現実的なものどもの全体ではない (§ 844)。それゆえ、神は世界ではない：この世界も、何らかの世界も神ではない。同じことは § 361,823 から、§ 365,839 から、§ 370,837 から、§ 388,843 から明らかである (cf. § 853)。

この世界は外世界的作出原因をもち (§ 375,388)、この原因は必然的実体である (§ 381,319)。それゆえ、必然的実体は可能である (§ 333,69)。必然的実体が可能であるなら、それは現実的であり (§ 109)、永続的である (§ 302)。それゆえ、必然的実体が存在する。神は必然的実体である (§ 836)。それゆえ、神は存在する (cf. § 854)。

神は外世界的有であり (§ 843,388)、世界は神の本質的なものでも本質でも属性でも様態でも変容でも附帯性でもない (§ 843)。神は唯一の実体ではない (§ 391)。「神学的スピノザ主義」[spinozismus theologicus] は、外世界的有としての神を廃棄する見解であり、それは誤りである (cf. § 855)。

§ 811 が神の存在をア・プリオリに証明するように、§ 854 はそれをア・ポステリオリに説得的に証明されたものとして確立し、両者とも、エゴイズム (§ 392)、イデアリスム (§ 402) および質料主義 (§ 395) が廃棄する諸命題に依存することなく証明する。それゆえ、それらは、神の存在について、エゴイスト、イデアリスト、質料主義者等々をも納得させるために利用されうる (cf. § 856)。

神は質料ではなく (§ 295,841)、それゆえ、彼は非質料的である (§ 422)。神は物体ではない (§ 296)。それゆえ、彼は非物体的である (§ 422)。それゆえ、彼は自然学的に不可滅である (§ 746)。同じことは § 837 から明らかである (cf. § 857)。

最も完全な世界は有限なものどものうちで神の最大の像であり (§ 436,852)、世界のうちには諸実体があり (§ 400,857)、諸実体のうちには諸精神があり (§ 402,531)、諸精神のうちには最大の知性に恵まれたものどもがあり (§ 637)、最大の知性に恵まれたものどものうちには最も幸運なものども (§ 787)、どのようなわるいものからも——ことに道徳的にわるいものから——最も遠く離れたものども (§ 788,813)、最も聖なるものどもがある (§ 828) (cf. § 858)。

神の本性 [natura] (naturans, cf. § 466) は、それらによって彼がみずからの諸結果の、端的にそのようであり、不可受動的な原因であるところの (§ 851) 彼の内的諸完全性の総括である (§ 430)。それゆえ、絶対的に可能なものはどれでも、神には自然学的に可能であり (§ 833)、それ自体において [in se] は不可能ではないであろうような何も神にとって自然学的に不可能ではなく (§ 469,833)、そこから、神にとって、同時に絶対的に必然的ではないであろうような何も自然学的に必然的ではなく、絶対的に偶然的なものどもは神にとっても自然学的に偶然的であり (§ 469,104)、世界のあらゆる外自然的な出来事のみならず、超自然的な出来事もそうである (§ 474,475) (cf. § 859)。

より一般的意味での自然主義者が、この世界におけるあらゆる超自然的な出来事を否定するなら、否定されたそれらの仮定的可能性のために、彼は誤っている。なぜなら、諸々の奇跡は、それらのそとに定立されるべき神との連結においても (§ 855,474) 可能であるので (§ 834)、それらは外的可能性ももつからである (§ 16,859) (cf. § 860)。

神およびあらゆる彼の完全性に唯一性が適合するかぎりにおいて (§ 846,844)、神における実在性の度に同質の度、およびあらゆる彼の完全性に同質の度は不可能である (§ 843,844)。こうして、一つとされた同質の量からは神およびあらゆる彼の完全性において出会う実在性の度は知解されえない。それゆえ、私たちは神も彼の何らかの完全性も計ることができない (§ 291)。私たちが計ることができないものは、「計り知れないもの」[immensum, unermesslich] である。それゆえ、神およびあらゆる彼の完全性は計り知れ

ないものである。その計り知れなさを次のことから私たちは知解する。すなわち、計る者は、真に計られるものにおいて諸部分、諸々の度あるいは様々なものがあるだけ多くの明晰な知覚をもつのでなければならない。したがって、神を真に計る者、あるいは、神にとって内的なものはいずれをも計る者は、何らかの有限の知性には適さない明晰で実在的に無限な諸知覚をもたねばならないこととなろう (§ 844) (cf. § 861)。

神はそれ自体において [in se] 把握されうるものであり (§ 632,809)、人間にも把握されうるものであり (§ 804-1000)、多くの様態で正当に、しかも実在的に定義されうる (§ 816)。「包括されうるもの」[comprehensibile, fasslich, ergründlich, erforschlich, erschöpflich] とされるのは、その「充満した認識」[plena cognitio, völlige, gänzliche Kenntnis] が可能なものであり、すなわち、あらゆる無知を排斥するものであり、したがって、満たされた [completus] 歴史的、哲学的、数学的認識である。「誰かにとって包括されえないもの」[incomprehensibile alicui, einem unfasslich, unergründlich, unerforschlich, unerschöpflich] は、その充満した認識を獲得するために、その者の諸力が充足的ではないところのものであり、この者にとって、かのものの充満した認識から離れていなければならないことが大きければ大きいほど、ますますその者にとって、与えられたものは包括されえない。或るものが大きければ大きいほど、その包括は有限な認識者にとってますます困難あるいは不可能である (§ 160,527)。したがって、最大のものはあらゆる有限なものにとって最大度に包括されえないものである (§ 261)。「理神論」[deismus] は、神については、おそらくその存在以外にはほとんど何も把握できないと定立する見解であり、たとえ神および神におけるあらゆるものが私たちにとってそしてあらゆる有限なものにとって最大度に包括されえないものであるとしても、それは誤りである (§ 861,806) (cf. § 862)。

\* 本稿は、科学研究費補助金（基盤研究 C：15K01984（檜垣）および特別研究員奨励費：15J00085（石田））による研究成果の一部である。

\* 草稿の段階で千葉建氏より多くのご教示をいただき、いくつかの重大な誤訳も是正された。記して謝意を表したい。

**Baumgartens Gottesbegriff**  
—— Übersetzung von Baumgartens *Metaphysica*. Der vierte Teil:  
die natürliche Theologie, das erste Kapitel: der Begriff von Gott,  
der erste Abschnitt: die Existenz Gottes ——

Yoshishige HIGAKI  
Ryuta ISHIDA

Der vorliegende Arbeit bietet die japanische Übersetzung der §§ 800 bis 862 der *Metaphysica* Baumgartens, um den Kontext der kantischen Teleologie genauer zu verstehen. Hier betrachtet sich der Begriff von Gott in der natürlichen Theologie.

Gott ist das vollkommenste Ding (ens perfectissimum) (Vgl. § 811). Das vollkommenste Ding ist ein reales Ding. Folglich ist es das Ding, dessen Realität so groß ist, als sie in einem Ding sein kann. Das vollkommenste Ding ist das realste Ding (ens realissimum), in dem die meisten und größten Realitäten sind. Es ist das höchste Gut, das metaphysisch allerbeste Ding (Vgl. § 806). Wenn auch in einem Ding alle Realitäten ohne Ausnahme gesetzt werden, so kann doch niemals daher ein Widerspruch entstehen. Also sind alle Realitäten in einem Ding beisammen möglich. Nun ist das vollkommenste Ding das realste unter den Dingen. Also kommt dem vollkommensten Ding die Allheit der Realitäten (omnitudo realitatum) zu, und zwar der größten, die in irgendeinem Ding sein können (Vgl. § 807). Existenz ist eine Realität, die mit dem Wesen und den übrigen Realitäten beisammen möglich ist. Also hat das vollkommenste Wesen die Existenz (Vgl. § 810).

Kants Kritik des ontologischen Gottesbeweises ist in besonders hohem Maße auf diesen Gottesbegriff Baumgartens bezogen.